

氏 名	井 上 輝 之 丞 いの うえ てる の じょう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 4 1 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 6 月 19 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	頭部外傷後の視床下部下垂体神経分泌の消長 (特に頭部外傷後遺症との可能なる関係)
論文調査委員	(主 査) 教 授 荒 木 千 里 教 授 青 柳 安 誠 教 授 近 藤 鋭 矢

論 文 内 容 の 要 旨

成熟猫を用い、頭部外傷ならびに対照実験として両側大腿骨骨幹部骨折後急性期から正常状態に復するまでの時期において、視床下部下垂体系の神経分泌の消長について組織学的検索を行なった。

頭部外傷後12時間像、1日像では旁脳室核、視束上核ならびに下垂体神経葉において、3日像では旁脳室核において、5日像では旁脳室核にのみそれぞれ分泌顆粒の著減を認めた。7日像、10日像では外傷前にまで回復し全然差異を認めなかった。両側大腿骨骨幹部骨折後では12時間像においてのみ旁脳室核、視束上核に分泌顆粒の減少を認めたが、1日像、3日像では骨折前に回復し差異を認めなかった。

上述の結果から考えると頭部外傷の場合は、生体の他の体部に加えられた如何なる外傷の場合よりも間脳に及ぼす影響が高度で、かつ比較的長時間にわたることが考えられる。これは頭部外傷後における間脳神経分泌の異常と頭部外傷後遺症との関連をある程度示唆するものごとくである。

もっともこの実験成績を直ちに人間の外傷後遺症に移すことはできないが、強いて考えれば間脳神経分泌系がその後異常過敏状態を後遺症として残すという可能性が一応問題となり得るところであろう。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

成熟ねこを用い、頭部外傷後の急性期において、視床下部下垂体系の神経分泌の消長を組織学的に検査した。

外傷後分泌顆粒の著明な減少を認めたのは、12時間後、24時間後には旁脳室核、視束上核と下垂体後葉、3日後には旁脳室核と視束上核、5日後には旁脳室核においてである。7日後、10日後には、もはや異常はない。対照実験として行なった大腿骨骨幹部骨折では12時間後にはのみ旁脳室核、視束上核に分泌顆粒の減少を認めるが、24時間以後には変化はない。

以上からみると、頭部外傷では間脳におよぼす影響が特に高度で、かつ比較的長く持続する。このことは頭部外傷後遺症との関連をある程度示唆するものと思われる。

このように本研究は学術上有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。